室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

トルコ語の接続詞のアクセント

メタデータ	言語: jpn 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2013-12-03 キーワード (Ja): トルコ語, アクセント, 例外アクセント, 接続詞, 意味カテゴリー表示機能 キーワード (En): 作成者: 福盛, 貴弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2713

北海道言語文化研究　　北海道言語研究会
No. 11, 63-75, 2013.

トルコ語の接続詞のアクセント

福盛　貴弘

On the accent of the Turkish conjunction

Takahiro FUKUMORI

要旨：本稿では、トルコ語の例外アクセントを考えるにあたって、音節構造からアクセントを予測する Sezer (1981)規則だけではなく、意味カテゴリー表示機能を考慮する必要があることを示唆している。

トルコ語の例外アクセントの中で、接続詞が副詞と同様に第 1 音節の直後に下がり目がある、いわゆる頭高型アクセントであるという現象の類似点を指摘した。内訳は、2 音節語は 22 語のうち 17 語が、3 音節語は 9 語のうち 6 語が頭高型アクセントである。

3 音節以上の語に対しての例外アクセント規則として Sezer (1981)規則がある。3 音節語の外来語源の接続詞を Sezer (1981)の例外アクセント規則に適用できるかを確認したところ、6 語のうち 1 語しか適用できなかった。よって、音節構造からの予測によって接続詞のアクセントが決定されているわけではないことが示唆される。

以上の考察から 2 音節語、3 音節語で頭高型アクセントが多数を占めている点をふまえ、接続詞には意味カテゴリー表示機能が適用され、第 1 音節の直後に下がり目があるアクセント型になったと考える。

キーワード：トルコ語　アクセント　例外アクセント　接続詞　意味カテゴリー表示機能

1.　緒言

トルコ語[1]のアクセント論は以下の 2 種に大別される。1 つは強さアクセント説で、もう 1 つは高さアクセント説である。強さアクセント説は、Lees (1961)、Lewis (1967)、Swift (1963)、Demircan(1975, 1976a, b)、Underhill (1976)、Sezer (1981)、Inkelas (1999)、Inkelas and Orgun (1998, 2003)など伝統的に多くの諸家に支持されている説である。一方の高さアクセント説は、近年の音響音声学による成果を受けて、Levi (2005)、福盛 (2010)に支持されている説である。

本稿では、トルコ語が高さアクセント説であるという福盛 (2010)の見解を踏襲する。

[1] 本稿におけるトルコ語はトルコ共和国で話されているイスタンブル方言を基盤とする共通語を指す。文字と音の対応で注記すべき点は ç[tʃ], c[dʒ], ı[ɯ], j[ʒ], ö[ø], ş[ʃ], ü[y]である。ğ は音節末なら前接の母音を長母音化、音節頭なら無音化する。

それは、福盛 (2010)で示された以下の点を支持するからである[2]。

(1)　音声学的に強母音に対立する弱母音がない。
(2)　音韻論的に強母音に対して弱母音の音素数が減少しない。
(3)　音響音声学的に基本周波数の下降がアクセントの位置を指定するのに重要な要因である。

両説の基本アクセントおよび例外アクセントの捉え方には違いがある。強さアクセント説では、語の最終音節にストレスがあれば基本アクセント、それ以外の音節にストレスがあれば例外アクセントとしている。一方、高さアクセント説では、語に下がり目がなければ基本アクセント、下がり目があれば例外アクセントとしている。ただし、例外アクセントとなる語は両説で同じ範囲の語を指している[3]。

福盛 (2010)によると、竹内 (1996)に掲載された約 22,500 語の見出し語のうち、例外アクセントとしてアクセント記号が付与された見出し語は 1,681 語であったと報告されている。これは、全体の約 7.4%である[4]。では、その例外アクセントの中に基本アクセントとは異なる規則性が見出せるのだろうか。このことを検討するために、以下では福盛 (2010)における高さアクセント説、Sezer (1981)における音節構造によるアクセント型の予測、そして意味カテゴリー表示機能による例外アクセントを概観するのだろうか。このことを検討するために、以下では福盛 (2010)における高さアクセント説、Sezer (1981)における音節構造によるアクセント型の予測、そして意味カテゴリー表示機能による例外アクセントを概観する。

1.1.　福盛 (2010)における高さアクセント説

トルコ語のアクセントを高さアクセントと捉え、「トルコ語のアクセントは、音節境界に下がり目を指定するか否かで実現形が決まる」ことが福盛 (2010)によって示された。そこでは、基本アクセントは下がり目がなく、例外アクセントは下がり目が指定されることが示された。そして、下がり目には 2 種類あり、アクセント単位[5]の中で下がり目が 2 つ以上指定される可能性がある場合にはじめの下がり目が優先されるものを例外アクセントA(˥で示す)、複数指定される可能性があってもその下がり目が最優先されるものを例外アクセントB(˥˥で示す)としている[6]。この分類に基づいた規則を要約すると以下のようになる[7]。

---

[2] (1)は福盛 (2004)で、(3)は Levi (2005)で、音響音声学的に検証されている。
[3] ただし、付属語や小辞においては、強さアクセント説ではストレスがないと捉え、高さアクセント説では前アクセント、すなわち語幹の直前の音節境界に下がり目があると捉えているといった違いがある。
[4] 福盛 (2010: 42)では、竹内 (1996)や TDK (2005)におけるアクセント記号付与のミスを考慮して精査しても全体の 10%強になると推測できると述べられている。
[5] 本稿ではアクセント単位を{　　}、音節を σ で示す。
[6] 例外アクセントの質の違いを示すために˥の個数を変えている。
[7] (4)～(9)の音節数は任意のものである。用例については、福盛 (2010)を参照のこと。

(4) 基本アクセント語幹＋基本アクセント接辞
{σσ}＋{σ}→{σσσ}
(5) 基本アクセント語幹＋例外アクセント A 接辞
(5a) {σσ}＋{˥σ}→{σσ˥σ}
(5b) {σσ}＋{˥σσ}→{σσ˥σσ}
(5c) {σσ}＋{σ˥σ}→{σσσ˥σ}
(6) 基本アクセント語幹＋例外アクセント B 接辞
{σσ}＋{˥˥σ}→{σσ˥˥σ}
(7) 例外アクセント語幹＋基本アクセント接辞
{σ˥σ}＋{σ}→{σ˥σσ}
(8) 例外アクセント語幹＋例外アクセント A 接辞
(8a) {σ˥σ}＋{˥σ}→{σ˥σσ}
(8b) {σ˥σ}＋{˥σσ}→{σ˥σσσ}
(8c) {σ˥σ}＋{σ˥σ}→{σ˥σσσ}
(9) 例外アクセント語幹＋例外アクセント B 接辞
{σ˥σ}＋{˥˥σ}→{σσ˥˥σ}

(4)～(9)が語幹＋接辞におけるアクセント型となる。生産的に生じるアクセント型は以下のようになる。

(10a) 複合語アクセント {前部要素 ˥後部要素}
(5a)(5b)(8a)(8b)になる
(10b) 複合語アクセント {前部要素 ˥˥後部要素}
(6)あるいは(9)になる
(11) 後置詞アクセント {前項 ˥後置詞}
(5a)(5b)(8a)(8b)になる
(12) 小辞アクセント {前項 ˥˥小辞}
(6)あるいは(9)になる

複合語アクセントにおける前アクセントは、複合語を形成する際に規則的に生じるものである。一方、後置詞や小辞[8]における前アクセントはその語や接辞がもっているものである。

他に、形容詞の強調形や次節で述べる意味カテゴリー機能によって一部の副詞や場所代名詞系[9]、疑問詞系などに対しては、第 1 音節の直後に下がり目があるという規則が働く。

[8] 後置詞と小辞は前項の語幹末の母音に対して母音調和に従うか否かで分けられている。後置詞は母音調和に従わず、小辞は従う
[9] 系としたのは、派生語を含むからである。

(13) {σ˥σ…}

以上がトルコ語のアクセント型の概略となる。なお、実現形については、下がり目が指定されなければ{L…H}というように末尾が高くなり[10]、下がり目が指定される場合には下がり目の直前が高くなる。

1.2. Sezer (1981)における音節構造によるアクセント型の予測

Sezer (1981)では、語の音節構造からストレスの位置が予測できるという説を示している。この説を以下に示す。

(14) strong word：後から 2 番目および／あるいは後から 3 番目の音節が重音節の語。
weak word：後から 2 番目と 3 番目の音節が軽音節の語。

(15) weak NFS(non-final stress) word に対する例外アクセント規則 : weak NFS word は後から 2 番目の音節にストレスがある。

(16) strong NFS word に対する例外アクセント規則 : 後から 2 番目の音節が重音節であればそこにストレスが、軽音節であれば後から 3 番目の音節にストレスがある。

この説におけるストレスを下がり目に置き換えると、以下のようになる。後から 2 番目の音節にストレスがあるというのを、後から 2 番目の音節の直後、あるいは最終音節の直前の音節境界に下がり目があると、後から 3 番目の音節にストレスがあるというのを後から 3 番目の音節の直後、あるいは後から 2 番目の音節の直前の音節境界に下がり目があるということができる。

形容詞の強調形については第 1 音節にストレスがあるとしており、これは本稿では(13)と置き換える。派生接辞-en によって形成される副詞の規則も示されているが、これは(16)に相当する規則であるが、-en の場合、strong NFS word だけでなく、weak NFS word にも適用できる点で(16)とは別規則となる。

(14)～(16)の規則で処理できない反例として、重音節の音節末に共鳴音(l, m, n, r)がある場合(Bandır˥ma～Ban˥dırma(地名)というゆれや、kampa˥na(ベル＜英語)など)が Sezer (1981:67-68)で指摘されている。ただし、その規則性はまだ明らかではない。

1.3. 意味カテゴリー表示機能による例外アクセント

本稿でトルコ語の例外アクセントを検討していく際に、重要な概念として意味カテゴリー表示機能がある。意味カテゴリー表示機能とは、上野 (2002: 176)において、同じ意味カテゴリーに属する語が同じアクセント型になりやすい傾向があるという機能であるという旨が示

[10] 語末が高くなるのは語声調によるものだと考えられる。これは語の最終音節あるいは句末あるいはフランス語のようにリズムグループ(groupe rythmique)の末尾で上昇する現象とは異なる。また、小辞の直前の上昇と類似して、句末の上昇はアクセントの下がり目の直前にある高さとは質が異なる。この点はまだ研究が進展していないため、解決されていない問題である。福盛 (2011)参照。

されている。これは同じ品詞が同じアクセント型になりやすい言語があるいうように拡大解釈ができる。形容詞の強調形や一部の副詞において、意味カテゴリー機能による規則が働くことを先述した。他に、外来語以外では以下のような意味カテゴリーに属する語が例外アクセントになりやすい。

(17) 外来語 : pusuɭla(羅針盤＜イタリア語)、mukavɭva(ボール紙＜アラビア語)、radɭyo(ラジオ＜フランス語) など
(18) 副詞 : şimɭdi(今)、sonɭra(後で)、gerɭçekten(本当に) など
(19) 地名名詞 : Anɭkara(アンカラ)、İstanɭbul(イスタンブル) など
(20) 親族名詞 : anɭne(母)、abɭla(姉)、teyɭze(おば)、amɭca(おじ) など
(21) 感動詞 : hayɭdi(さあ)、peɭki(よし)、yuɭha(ひっこめ) など
(22) 疑問詞 : neɭre(どこ)、hanɭgi(どの、どんな)、naɭsıl(どんな) など
(23) 場所代名詞 : buɭra(ここ)、şuɭra(そこ)、oɭra (あそこ) など

竹内 (1996)に示された例外アクセントは 1,681 語であったが、うち 1,148 語が外来語（内訳としては、イタリア語 318、アラビア語 229、フランス語 157、ギリシア語 125、ペルシア語 71、英語 36 が多数を占める[11]）であった。また、残りの 533 語のうち目立つものとして、副詞 144、地名名詞 111、強調形容詞 64、感動詞 18、親族名詞 14、疑問詞 9 があげられる[12]。

1.4. 本研究の目的

トルコ語アクセント論では、複合語などの生産的な要因、音節構造による予測、意味カテゴリー機能による分類によって規則的に決定される例外アクセントがどのようなものであるかを考えることができる。そのことによって、現時点で例外の例外とされている語が何であるかをより詳しく調べられる契機となるからである。これまでは 1.2 節に示した Sezer (1981) 規則によって、音節構造からストレスの位置を予測する見解が主となっていた。その結果、他の見解が生まれなくなっていた。特に、品詞別の意味カテゴリー機能を考察した論考はこれまでにない。副詞は第 1 音節の後ろに下がり目がある、いわゆる頭高型アクセントになりやすいという点で意味カテゴリー表示機能が働いている。接続詞もこれと同様の傾向があると考えられる。そこで、本稿では例外アクセントの 1 つであるトルコ語の接続詞のアクセントを考察することを目的とする。

---

11 竹内 (1996)の外来語表記は TDK (1988)に依拠している。ここでは、TDK (2005)も調べ、補足している。なお、複数の言語が示されている語(ドイツ語とフランス語が併記されている blokɭnot(付箋)など)、複数の言語で語形成されている語(フランス語語幹とトルコ語接辞で形成された liɭse-li(高校生)など)はここでは除外して数値を示している。また、強調形容詞は形容詞としてもカウントしており、疑問詞は名詞・形容詞・副詞と重複するため、単純加算の内訳ではない。なお、複数の品詞表記がなされている語(形容詞と副詞が併記されている çocukça(こどもっぽい、こどもらしく)など)はここでは除外して数値を示している。

12 強調形容詞は形容詞としてもカウントしており、疑問詞は名詞・形容詞・副詞と重複するため、単純加算の内訳ではない。なお、複数の品詞表記がなされている語（形容詞と副詞が併記されている çocukça（こどもっぽい、こどもらしく）など）はここでは除外して数値を示している。

2. トルコ語の接続詞のアクセント

2.1. トルコ語辞典見出し語におけるアクセント

竹内 (1996)ではトルコ語のアクセントを強さアクセントと捉え、ストレスがどこにあるかが示されているが、本稿では福盛 (2010)で示された高さアクセント説でトルコ語のアクセントを捉えることとする[13]。福盛 (2010)におけるトルコ語のアクセントは、下がり目がない語を基本アクセント、下がり目がある語を例外アクセントとして扱っている。

竹内 (1996)の見出し語では接続詞は 40 語あり[14]、頭高型アクセントになる語は（24）のとおりである。

(24) 頭高型アクセントになる接続詞

(24a) 3 音節語

meğerki（もし～でないなら）, meğerse（さては、どうも～らしい）, nitekim（事実、やはり）, velhasıl（要するに）, vesselâm（それまで）[15], veyahut（あるいは）

(24b) 2 音節語

ama（しかし）, çünkü（なぜなら）, eğer（もし）, fakat（しかし）, gerçi（そうであっても）, hatta（また）, imdi（さて）, keza（もまた）, madem（～だから、～のに）, meğer（さては、どうも～らしい）, oysa（にもかかわらず）, veya（または）, yahut（あるいは）, yani（すなわち）, yoksa（もしかしたら、でなければ）

40 語のうち 1 音節語が 5 語ある。1 音節の自立語には例外アクセントがない[16]ので、これを除く。2 音節語は 22 語の 17 語が頭高型アクセントである。3 音節語は 9 語のうち 6 語が頭高型アクセントである。3 音節語のうちhalbuki（しかし）は後ろから 2 番目の音節の後ろに下がり目がある。他 4 語はha ha（～や～や） ne ne（～も～も） ya da（～か～か） ya ya（あるいは）といった語であり、1 音節語としてあらわれるか、複合語として用いるので、ここでは考察の対象から除外した。以上の点から、例外アクセントとしての頭高型アクセントとなる 2～3 音節語の接続詞は 23 語となる。

2.2. 接続詞における品詞間の連続性

本項では、トルコ語の接続詞が副詞と同様の頭高型アクセントであるという傾向を考える

---

[13] 強さアクセント説では語末にストレスがあるのが基本アクセントであり、語末以外にストレスがあるのが例外アクセントである。一方で、高さアクセント説では語末が高くなるのは語声調によるものであって、語頭および語中で高くなるのが下がり目によって引き起こるものと考えている。よって、強さアクセント説による áma（しかし）であれば、高さアクセント説では/a˥ma/と捉えることになる。ただし、語頭および語中のストレスは、下がり目の直前であるため、強さアクセントの記述であっても高さアクセント説に解釈して考えることができる。

[14] トルコ語において接続語はそもそも少数である。よって、出発点として 40 語を扱うにいたった。

[15] vesselâm は感動詞としても扱われている。

[16] 1 音節語においては語声調によって語末が高くなるが、下がり目は自立語単独では前アクセントにならないため付与されることはない。下がり目というアクセントマークがつかないという点で、基本アクセントとしている。福盛 (2010)参照。

ために、両品詞間の連続性について考察する。

トルコ語の接続詞は、大多数が外来語である。内訳は、40 語のうちアラビア語源が 13 語、ペルシア語源が 15 語、アラビア語源あるいはペルシア語源とされるのが 2 語で、計 30 語が外来語である。

アラビア語はアフロアジア語族、ペルシア語はインドヨーロッパ語族であるが、共に屈折語である。こういった言語では、固有語かつ他の品詞とは独立した形での接続詞が存在する。一方、アルタイ諸語やアルタイ型言語（日本語、朝鮮語、古アジア諸語など）といった SOV 語順の膠着語では、インドヨーロッパ語族のような他の品詞から独立した形としての接続詞（特に従属接続詞）は原則として存在せず、副詞や接続形となる助詞、接辞などが転成した形や外来語などが接続詞として扱われている。

接続詞と副詞の連続性については、多くの言語で議論されている。日本語では、松下 (1901)や山田 (1908)では、日本語における接続詞を否定し副詞の一種とみなす学説が提案されている。ただし、これらの学説は後に徳田 (1936)、時枝 (1950)、渡辺 (1957)、塚原 (1958)、市川 (1965)など多くの論考において接続詞否定論は批判され、接続詞を独立した品詞としてたてるべきだと主張している[17]。

そこで、トルコ語における品詞の扱いを辞典や文法書において確認しておく。辞典においては特に定義されず品詞が示されている。文法書では、一般的な「文と文、語と語をつなぐ機能を有する語」程度のことしか書かれていない。そこで、諸氏が接続詞とあげている語を例示して考えていく必要がある。表 1 では、Ergin (1962)、Lewis (1967)、テュレリ (1969)といった文法書に接続詞として扱われている語を抜き出し、それらの語が竹内 (1996)、TDK (2005)といった辞典でどのような品詞で扱われているかを示す形となっている[18]。

表 1：トルコ語の接続詞における辞書・文法書間での異同

著書 / 語	Ergin (1962)	Lewis (1967)	テュレリ (1969)	竹内 (1996)	TDK (2005)
âdeta	接続詞			副詞	
ama		接続詞	接続詞	接続詞	接続詞
ancak		接続詞		副詞	副詞
çünkü	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞
de	接続詞	接続詞	接続詞	付属語	接続詞
demek		接続詞		接続詞	
eğer	接続詞			接続詞	接続詞

17 ただし、これらは接続詞を独立の品詞とすることを認めないことに対する批判であって、副詞との類似点や相違点は統語論的機能と意味論の観点からそれぞれの見解に基づいて論じられている。

18 文法書における空欄は、接続詞以外で扱われている、あるいは記述がなかったことをあらわす。辞典における空欄は記述がなかったことをあらわす。また、竹内（1996）における接続詞で、他の辞典や文法書において異なる品詞で提示されていない語は表 1 には掲載していない。

fakat	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞
gerçi	接続詞	接続詞		接続詞	副詞
gerek		接続詞		接続詞	接続詞
güya	接続詞	接続詞		副詞	副詞
ha ha		接続詞		接続詞	接続詞
halbuki		接続詞		接続詞	接続詞
hani		接続詞		副詞	副詞
hele	接続詞	接続詞		副詞	接続詞
hem	接続詞	接続詞	接続詞	副詞	接続詞
herhalde		接続詞		副詞	副詞
ille	接続詞	―		副詞	
işte		接続詞		感動詞	付属語
ise	接続詞	接続詞	接続詞	付属語	
ister ister		接続詞		接続詞	接続詞
ki	接続詞	接続詞		付属語	接続詞
lâkin		接続詞		接続詞	接続詞
madem	接続詞	接続詞		接続詞	接続詞
mamafih		接続詞		接続詞	副詞
meğer	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞
meğerki	接続詞	接続詞		接続詞	接続詞
ne ne	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞
nitekim		接続詞		接続詞	副詞
oysa		接続詞		接続詞	接続詞
sakın		接続詞		感動詞	感動詞
sözde		接続詞		副詞	形容詞
ta	接続詞			副詞	
tek	接続詞			形容詞	
ve	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞
velev	接続詞			接続詞	
veya	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞
veyahut	接続詞	接続詞		接続詞	接続詞
ya	接続詞	接続詞		接続詞	接続詞
ya ya	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞
yahut	接続詞	接続詞		接続詞	接続詞
yalnız		接続詞		副詞	形容詞
yeter	接続詞			形容詞	

yok		接続詞		接続詞	接続詞
yoksa	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞	接続詞
zira		接続詞		接続詞	接続詞

表 1 から接続詞と扱われる語における諸氏の品詞分類に若干の差異があることが確認できる。その中でまず付属語として扱われている語について検討する。福盛 (2010)において、後置詞のアクセントは(2)のように、小辞のアクセントは(3)のように扱われている。

(25) { 前項 ˥後置詞 }
(例) baba gibi （父のように）
LH LL
(26) { 前項 ˥˥小辞 }[19]
(例) baba da （父も）
LH L

後置詞はその後の直前、すなわち前項と後置詞との音節境界に下がり目があるアクセント型を有している。小辞も基本的には後置詞と同様であるが、小辞の直前の下がり目が前項の例外アクセントによる下がり目より優先される型となっている[20]。従って、機能面はともかくとして、アクセント型からいえば全く異なる型を有することになる。表 1 で示されるde（～は、～も、～が、～ので）は(26)、ise（～なら）は(25)のアクセント型を有しているので、アクセント型からみた場合、接続詞に分類しがたい語といえる。これは、トルコ語の接続語を自立語と扱うか付属語（機能語）と扱うかの問題に関わる。(24)で示した語は、語の直前に下がり目がある例外アクセントの語ではなく、語中の音節境界に下がり目がある例外アクセントの語である。アクセント型の観点からは、語中の音節境界に下がり目がある型は自立語、語の直前に下がり目がある方は付属語と分類できる。よって、他の語との整合性を考えると、先にあげた 2 語は自立語としての接続詞ではないと考える方が妥当であろう[21]。なお、ki（～ので、～のに）はペルシア語源の外来語で、ペルシア語では接続詞として用いられており、それがトルコ語に借用されて多様な用法を担っている。そして、アクセント型は他の付属語とは異なり、基本アクセントである。よって、先の 2 語とは異なる扱いをした方がよいと考

[19] Kawaguchi, Yılmaz and Yılmaz (2006)や佐藤 (2008)など近年の研究において、疑問小辞 mi においてフォーカスイントネーションによって直前がアクセントによる指定よりもかなり高くなることが指摘されている。よって、小辞についてはアクセントとイントネーションが重畳した高低の実現になっている。この点については、本稿の範囲ではないので、前述の論考に詳細をゆだねる。

[20] 福盛（2010：60)で、トルコ語の例外アクセントについて以下のように 2 種のタイプを認めている。
例外アクセントには主に 2 種のタイプがある。例外アクセント A はその前に下がり目があればその前の下がり目を優先するタイプで，例外アクセント B はその下がり目が最優先されるタイプである。

[21] トルコ語の付属語のアクセントについては、改めて別稿で詳細を論じることにする。

える[22]。

次に、副詞のアクセントについて検討する。副詞のアクセント型は、福盛（2010）では(27)のように扱われている。

(27)　{σ˥σ…}

副詞は第 1 音節の直後に下がり目があるアクセント型が多く、意味カテゴリー表示機能が適用されている。この点が、接続詞のアクセント型と類似している。これについては現象として、接続詞と副詞の品詞分類の連続性がトルコ語においてはアクセント型においてあらわれているという可能性を指摘しておく[23]。

なお、形容詞も副詞との品詞間の連続性がある。ただし、表 1 における tek（唯一の、だけ）は 1 音節語であるため基本アクセントであり、yeter（十分な）も基本アクセントである。福盛 (2010：59)では、この点に関して、

> もともと形容詞である語が副詞として用いられる場合、必ずしもいわゆる頭高型にはならず、もとのアクセントを保つことが多く、もともと副詞である語は、いわゆる頭高型が多い（中略）この点では、同音異義語で一方が副詞となる場合における意味カテゴリー表示機能は過渡期の段階であるといえる。

と述べられている。tek と yeter については、意味を考えるともともと形容詞であるため、接続詞であるとはいいがたい語である点が、アクセント型にもあらわれたのではないかと考える。

最後に、感動詞と扱われている語であるが、今のところトルコ語の感動詞にはアクセント型の傾向性が析出できない[24]。よって、これに該当する語は機能面から考慮する必要があるため、本稿の範囲では何もいえない。これは、感動詞のアクセント分析を含め、今後の課題となる。

以上の点から、副詞との品詞の連続性から接続詞のアクセント型が決まったのではないかという可能性は示唆するが、詳細な検証は今後の課題とする。

---

[22] ki は文頭に来ることはないので、他の自立語としての接続詞とは性質が異なる。この点は、統語論的な考察が必要なので、本稿の範囲では特定することができない。

[23] 他に第 1 音節の直後に下がり目がある型として形容詞の強調形がある。例えば、kara（黒、黒い）は基本アクセントであるが、kapkara（真っ黒、真っ黒な）のように強調形となった場合は、第 1 音節の直後に下がり目があるアクセント型になる。ただし、強調形は生産的にアクセント型を変更する性質のものであって、辞書的にその語が有しているアクセント型とは区別すべきなので、本稿では同列には論じないことにする。

[24] 感動詞は例外アクセントが多いのだが、副詞や後置詞や小辞などのように例外の中にみられる規則性、傾向性が析出できていないということである。

2.3. 外来語のアクセント

残る問題として、トルコ語の接続詞には外来語が多いという点について検討しておく。外来語は例外アクセントになることが多い。ただし、その多くは Sezer (1981)における規則が適用される。その規則を(14)～(16)に示した。

(14)～(16)のストレスの位置の予測については、本稿ではストレスがあるとされる音節の直後に下がり目があると読みかえる。ここで重要な点は、外来語が例外アクセントになる場合には、(14)～(16)の規則が適用されるのが原則であり、接続詞のように多数が頭高型になるというわけではないということである。竹内 (1996)における接続詞で 3 音節語は 6 語であるが、それらを Sezer (1981)にあてはめると(31)のようになる。分類に用いた記号は以下の通りである。音節構造に従い、重音節（音節末が子音あるいは長母音の音節）を h、軽音節（音節末が短母音の音節）を l とした。hl とは、後から 3 番目の音節が重音節、後ろから 2 番目の音節が軽音節であることを示す。数値については、1-3 とある場合は、前から数えて第 1 音節の後に下がり目があり、後から数えて 3 番目の音節の後に下がり目があるということを示す。

(31) トルコ語における 3 音節語の接続詞のアクセント
(31a) hh_1-3 vel.ha.sıl（アラビア語源、ha は長母音となるため重音節）
(31b) hl_1-3 ves.se.lâm（アラビア語源）
(31c) lh_1-3 me.ğer.ki（ペルシア語源）, me.ğer.se（ペルシア語源＋トルコ語接辞）,
ve.ya.hut（アラビア語源、ya は長母音となるため重音節）
(31d) ll_1-3 ni.te.kim（語源不明[25]）

(31)であげた中で、(31b)だけが Sezer (1981)に該当する例であり、(31a), (31c), (31d)については該当しない。よって、Sezer (1981)規則の例外となる。そして、接続詞における多数派のアクセント型は頭高型であった。こういった点から、Sezer (1981)規則とは異なる要因である意味カテゴリー表示機能から接続詞が頭高アクセントになったと考えられる。

3. 結語

本稿では、トルコ語の例外アクセントの中で接続詞が副詞と同様に第 1 音節の直後に下がり目がある、いわゆる頭高型アクセントであるという現象の類似点を指摘した。内訳は以下のとおりである。2 音節語は 22 語のうち 17 語が、3 音節語は 9 語の 6 語が頭高型アクセントである。

3 音節以上の語に対しての例外アクセント規則として Sezer (1981)規則がある。3 音節語の外来語源の接続詞を Sezer (1981)の例外アクセント規則に適用できるかを確認したところ、6 語のうち 1 語しか適用できなかった。よって、音節構造からの予測によって接続詞のアクセ

[25] nitekim の語源は不明であるが、トルコ語の固有語とは想定しにくいので、外来語源として扱う。

ントが決定されているわけではないことが示唆される。

2 音節語、3 音節語で頭高型アクセントが多数を占めている点をふまえ、接続詞には意味カテゴリー表示機能が適用され、第 1 音節の直後に下がり目があるアクセント型になったと考える。

本稿の分析は 1 冊の辞典から出発しているので、全体像をとらえきれているとは言えない。また、品詞の連続性についてはまだまだ課題が残っている。ただ、トルコ語のアクセントは 9 割程度は基本アクセントである。これまでは残りの例外アクセントが Sezer (1981)規則で解けると思われていたが、副詞や接続詞のアクセントは意味カテゴリー表示機能が働いており、必ずしも Sezer (1981)規則だけでは予測できないことが分かった。つまり、トルコ語の例外アクセントの規則に関しては、Sezer (1981)規則だけではなく、意味カテゴリー表示機能も考慮しなければならない、ということが示唆されたのである。とにかくこういった足し算を繰り返して 100 に近づくことが、今後の大きな課題である。

謝辞

* 本稿は、科学研究費助成事業、学術研究助成基金助成金基盤研究 C(課題番号 23520472)「トルコ諸語におけるプロソディー分析」（平成 23-25 年度、研究代表者：福盛貴弘）による研究成果である。私事であるが、2012 年 2 月に脳炎で倒れて以来、後遺症による失語症の症状に苛まされたが、周囲の多くの人の支えを受けて、少しずつものが書けるようになってきた。今の病状では、表現や論理にまだまだ問題があることは言うまでもない。この点については、2 名の匿名査読者から有益な示唆を得て、理解できる範囲で修正することができた。この場を借りてお礼申し上げる。

参考文献

Demircan, Ömer (1975) Türk dilinde vurgusu: Sözcük vurgusu. *Türk Dili* 284: 333–339.

Demircan, Ömer (1976a) Türk dilinde ek vurgusu. *Türk Dili* 294: 196–200.

Demircan, Ömer (1976b) Türkiye yer adlarında vurgu. *Türk Dili* 300: 402–411.

Ergin, Muharrem (1962) *Türk Dil Bilgisi.* İstanbul: Bayrak.

福盛貴弘（2004）『トルコ語の母音調和に関する実験音声学的研究』東京：勉誠出版

福盛貴弘（2010）「トルコ語のアクセントについて」『言語研究』137: 41-63.

福盛貴弘（2011）「トルコ語のなぞなぞの音声分析」『一般言語学論叢』14: 1-39.

市川孝（1965）「接続詞的用法を持つ副詞」『国文』24:1-7. お茶の水女子大学国語国文学会

Inkelas, Sharon (1999) Exceptional stress-attracting suffixes in Turkish: representations versus the grammar. In: René Kager, Harry van der Hulst and Wim Zonneveld (eds.) *The prosody-morphology interface*, 134–187. Cambridge: Cambridge University Press.

Inkelas, Sharon and Cemil Orhan Orgun (1998) Level (non)ordering in recursive morphology: evidence from Turkish. In: Steven G. Lapointe, Diane K. Brentari and Patrick. M. Farrell (eds.) *Morphology and its relation to phonology and syntax*, 360–392. Stanford: CSLI.

Inkelas, Sharon and Cemil Orhan Orgun (2003) Turkish stress: a review. *Phonology* 20(1): 139–161.

Kawaguchi, Yuji, Selim Yılmaz and Arsun Uras Yılmaz (2006) Intonation Patterns of Turkish Interrogatives. In: Kawaguchi, Yuji, Ivan Fonágy and Tsunekazu Moriguchi (eds.) *Prosody and Syntax Cross-linguistic Perspectives*, 349–368. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Lees, Robert (1961) *The phonology of modern Turkish. Washington*: The Middle East Institute.

Lewis, Geoffrey L. (1967) *Turkish Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Levi, Susannah V. (2005) Acoustic correlates of lexical accent in Turkish. *Journal of the International Phonetic Association* 35(1): 73–97.

松下大三郎（1901）『日本俗語文典』誠之堂書店

オルハン・テュレリ（1969）『トルコ語－文法・会話』丸善

佐藤久美子（2008）「トルコ語の yes/no 疑問文におけるピッチ付与規則」寺村政男・久保智之・福盛貴弘（編）『言語の研究―ユーラシア諸言語からの視座―』語学教育フォーラム 16: 209-221. 東京：大東文化大学語学教育研究所

Sezer, Engin (1981) On non-fi nal stress in Turkish. *Journal of Turkish studies* 5: 61–69.

Swift, Lloyd Balderston (1963) *A Reference Grammar of Modern Turkish*. (Uralic and Altaic Series. 19.) Bloomington: Indiana University, The Hague: Mouton.

竹内和夫（1996）『トルコ語辞典：改訂増補版』大学書林

TDK(1988) *Türkçe Sözlük*. 8. baskı. Ankara: Türk Dil Kurumu.

TDK (2005) *Türkçe Sözlük*. 10. baskı. Ankara: Türk Dil Kurumu.

時枝誠記（1950）『日本文法口語篇』岩波書店

徳田浄（1936）『国語法査説』文學社

塚原鉄雄 （1958）「接続詞」『続日本文法講座 1 文法各論編』156-174. 明治書院

Underhill, Robert (1976) *Turkish grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.

上野善道（2002）「アクセント記述の方法」飛田良文・佐藤武義（編）『現代日本語講座 3 発音』163-186. 明治書院

渡辺実（1957）「副用語・付属語」『日本文法講座 1』77-95. 明治書院

山田孝雄（1908）『日本語文法論』宝文館

執筆者紹介

氏名： 福盛貴弘

所属： 大東文化大学外国語学部

Email： ICG01649@nifty.com